

## 報 告

食物アレルギーの子どものきょうだいが体験する  
生活上の影響石川 紀子<sup>1)</sup>, 西野 郁子<sup>1)</sup>, 齊藤 千晶<sup>2)</sup>

## 〔論文要旨〕

食物アレルギーをもつ子どものきょうだいが体験する生活上の影響と、それに伴うきょうだいの行動、家族の関わりを明らかにすることを目的に、子どもが2人以上いる親12名を対象に面接調査を行った。きょうだいの年齢は3~21歳であった。子どもの食物アレルギーに伴い、きょうだいは食生活の変化だけでなく社会生活の変化も体験していた。このような経験をきょうだいに対して親は、子どもの疾患や治療についての具体的な説明や、きょうだいの協力を認める関わりやきょうだいの食生活への配慮を行っていた。日常生活の変化や制限によってきょうだいが受ける心理社会的影響を最小限にするためにも医療者による支援の検討が望まれる。

Key words : きょうだい, きょうだい支援, 食物アレルギー

## I. はじめに

子どもの健康障害や治療は、子ども自身だけでなくその家族にもさまざまな影響を与える。特に、健康障害をもつ子どものきょうだいは、健康障害をもつ子どもの治療や入院等により、日常生活や生活環境の変化、親子関係を含む家族関係の変化を経験し、その影響から心身の不適応や行動上の問題を生じやすいことが国内外の文献で報告されている<sup>1-3)</sup>。きょうだいに起こっている影響を明らかにすることを目的にわれわれが行った調査でも、きょうだいは情緒・行動面、体調面、学校生活面に多様なストレス反応を示しているが、母親の身体・精神状態が良い場合でも、約半数のきょうだいにストレス反応がみられていた<sup>4)</sup>。

健康障害の中でも、食物アレルギーをもつ子ども(以下、子ども)の治療は、家庭での日常生活や除去食管理が基本となるため、共に生活を送る食物アレルギーの子どものきょうだい(以下、きょうだい)も、さまざまな影響を受けていると考えられる。きょうだいが

受ける影響は、家庭の環境や母親の関わりによるところが大きいことが考えられるが、母親は、子どもの日常ケアのほとんどを担い大きな負担を抱えていることや、誤食によるアレルギー症状発症への不安や症状コントロールの困難感、集団生活での食事や代替食の経済的負担と、さまざまな困難や負担を感じていると言われている<sup>5,6)</sup>。そのため、子どもの治療に伴いきょうだいが受けている影響やきょうだいが示している行動に母親が気づき、対応していくことは難しい。このような状況において、きょうだいへの影響は毎日の生活の中で長期にわたり継続されるため、きょうだいの心身や社会性の発達にも影響があると考えられる。食物アレルギーの子どもの除去食が家族やきょうだいに及ぼす影響については、家族全員が制限食を実施したことやきょうだいへのがまんの強要が行われている体験については報告されているが<sup>7)</sup>、そのほかにきょうだいが体験している生活上の影響については明らかとなっていない。よって、食物アレルギーの子どものきょうだいが体験する生活上の影響とそれに伴うきょう

Influences on the Daily Life Experienced by Siblings of Children with Food Allergy

[2866]

Noriko ISHIKAWA, Ikuko NISHINO, Chiaki SAITO

受付 16. 9. 8

1) 千葉県立保健医療大学(研究職/看護師)

採用 18. 1. 12

2) ユーカリが丘アレルギーこどもクリニック(看護師)

うだいの行動, 家族の関わりやきょうだいを受けてきたサポートについて明らかにすることを目的に, 調査を行った。

## II. 研究目的

食物アレルギーをもつ子どものきょうだいが体験する生活上の影響と, それに伴うきょうだいの行動, 家族の関わりやきょうだいを受けてきたサポートについて明らかにすること。

## III. 研究方法

### 1. 対象

アレルギー疾患の子どもの患者会(家族会)に所属する会員のうち, 食物アレルギーをもつ子どものほかに食物アレルギーをもたない子どもをもつ親で, 研究参加に同意の得られた親を対象とした。

### 2. 調査期間

2013年3~4月。

### 3. 調査方法

対象者に対し, 子どもの食物アレルギーの診断や治療に伴いきょうだいが体験した生活上の影響, きょうだいの行動や様子で親が気になったこと, きょうだいを受けている影響に対して家族が意識的に行っていたこと, 子どもの疾患や治療に関する親からきょうだいへの説明, きょうだいが周囲の人から受けてきたサポートと必要と感じるサポートについて, 面接ガイドを用いた半構成的面接を行った。同意が得られた場合はICレコーダーによる録音を行った。また面接前に, 子どもときょうだいの年齢やアレルギー疾患などの基

礎的データを質問紙にて調査した。なお, きょうだいが複数名いる場合は, 親から見て影響をより強く受けたきょうだいについて回答を求めた。面接は, 対象者の自宅や希望した場所で行った。なお面接ガイドは, 関連する先行研究をもとに, 共同研究者間で慢性疾患をもつきょうだいの生活上の影響や親の関わり, 周囲からのサポートが引き出せる設問であるかについて検討し作成した。

### 4. 分析方法

面接の録音内容から逐語録を作成し, 研究目的に沿ってデータから《きょうだいが体験した生活上の影響》, 《きょうだいの行動》, 《家族の関わり》, 《きょうだいが受けてきたサポート》と, それらに関連した事柄を帰納的に分析した。分析の際には, 3名の共同研究者で検討を行い, 妥当性を確保した。

### 5. 倫理的配慮

対象者に, 研究の趣旨, 結果の公表, 自由意思による研究参加, 匿名性の保持, 不利益からの保護等を文書と口頭で説明した。承諾が得られた場合には, 文書による同意書を得て, 調査を行った。なお, 本調査は所属機関の研究等倫理審査委員会の承認を得て実施した(申請番号2012-061)。

## IV. 結果

### 1. 対象者の背景(表)

調査の対象は12名で, 全員が母親であった。子どもの年齢は2~15歳であり, 食物アレルギーの診断は, 生後1~9か月頃に受けていた。食物アレルギー以外の疾患として, アトピー性皮膚炎, 気管支喘息, アレ

表 対象となった子ども・きょうだいの概要

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
年齢・性別	2歳, 女	6歳, 女	6歳, 男	6歳, 女	9歳, 男	9歳, 男	9歳, 男	9歳, 女	10歳, 男	10歳, 男	11歳, 女	15歳, 男
食物アレルギー以外の疾患	AD	AR, BA	AD	AD, BA	AD, AR	AD	AD, BA	BA	AR, BA	AD	なし	AD, BA
調査時に除去しているアレルゲン	小麦, 卵	卵, 牛乳, ビーナッツ, 他	卵, ビーナッツ, そば	牛乳, ビーナッツ, そば, 他	小麦, 牛乳	卵, ビーナッツ	卵, 牛乳, ビーナッツ, 他	卵	魚卵	卵	牛乳, 魚卵, 他	
きょうだいの年齢・子どもからみた関係	4歳, 姉	8歳, 姉	8歳, 兄	9歳, 姉	11歳, 姉	11歳, 兄	12歳, 兄	18歳, 姉	3歳, 弟	19歳, 兄	19歳, 姉	21歳, 姉

AD: アトピー性皮膚炎, AR: アレルギー性鼻炎, BA: 気管支喘息

ルギー性鼻炎がある子どももいた。また、きょうだいの年齢は3～21歳であり、出生順位は、きょうだいの方が年上であるのは11名で、1名はきょうだいの方が年下であった。きょうだいには、4名にアレルギー性鼻炎があった。

以下、帰納的に分析された内容を【 】に示しながら、結果について述べる。

## 2. 食物アレルギーや治療に伴う、きょうだいの生活上の影響

子どものアレルギー疾患や治療に伴い、きょうだいは日常生活の中で、さまざまな影響を受けていた。それまで飲食可能であった食材が家の中からなくなることや、アレルギーとなる食材・調味料を使用しない食事になるなど、12名中10名のきょうだいが【家庭での食事やおやつ内容の変化】を経験していた。また、【外食の機会の減少】や、親と一緒に料理を作ることや食器洗いの【手伝いをする機会の減少】も経験していた。食生活以外の影響として、アナフィラキシーショックを起こした子どもの入院に親が付き添うことや、アトピー性皮膚炎の症状からくる子どもの痒みに親が対応するなど、【子どもの世話のために親がきょうだいに関わる時間が減少】したことが述べられた。さらに、親のストレスや余裕のなさからきょうだいに目をかけられないなど、【親の心身の状態によりきょうだいと親との関係に変化】が起こっていた。また、きょうだいの友だちを自宅に呼ばなくなったなどの【きょうだい自身の友だちとの交流の機会や外出の機会の減少】、子どもの病院に親が行くためにきょうだいが学校を早退するといった【社会生活への影響】もあった。さらに、子どもが痒みや食べ物の制限による苛立ちをきょうだいにぶつけるといった、【きょうだい関係への影響】や、【食事が充実しないことによる痩せ】などの経験をしていた。

一方で、子どもよりきょうだいの出生順位が下である1名の家庭では、きょうだいが出生した時から子どもに合わせた食生活であったため、外食ができない状況についてもきょうだいは不満を表していなかった。また、アレルギーである卵を使った料理が家庭では出されないため、きょうだいには食物アレルギーがないにもかかわらず、保育園の給食で卵が出された時には抵抗を感じていた。

## 3. 食物アレルギーや治療に伴うきょうだいの行動

子どもの症状や日常生活での制限・治療に対して、きょうだいは協力的な行動を示す場合があった。半数のきょうだいは、アレルギーが含まれる食材を食べる時に子どもに見えないように配慮する、子どもが食べられる物を選択するなど、【子どもを気遣う】行動を示していた。また、外出先では子どもが食べられる物であるかを親に確認したり、食べ物をこぼさないようにする、アレルギーに触れた後で子どもに触る時は手を洗うなど【アレルギー除去のための対応に協力】したり、【周囲の人に子どもの症状や気をつけることを伝える】行動をとっていた。そのほかにも、子どもの薬の準備や内服の確認などの【与薬の手伝い】をしたり、掻痒感のある子どもに気を紛らわすといった【症状への対応】をきょうだいは行っていた。その他の行動として、【アレルギーに関する情報に関心を示す】行動や、【アレルギーに関連してきょうだいが知った情報を親に伝える】、食事やそれ以外の家事など【親の手伝いをする】行動をとっていた。

一方で、子どもの疾患や治療に関連して我慢をしていることを示すきょうだいもいた。【食事や日常生活での制限に対する不満】を、きょうだいが言動で表していたことが述べられた。ほかにも、子どもの入院で親が離れることや対応のために【親がきょうだいに関わる時間や関心が減少することを寂しがる】、制限されている食材を食べたがったり、近くに行くと手に取ったりと【食べ物への欲求を示す】行動をとっていた。さらに、子どもが食べられない物のおいしさを話してうらやましがらせるなどの【意地悪をする】こともあった。

## 4. きょうだいが受けている影響に対して、家族が意識して行っていた内容

子どもが家庭にいない時や父親がいる時を利用して、子どもが除去している食材を家や外出先できょうだいが食べられるように、【日頃除去している物を食べる機会を作る】ように母親は意識していた。また、子ども用に代替食を作る、代替食品を利用する、アレルギーとなる食材を使わない料理作りといった【子ども以外の食生活を変えないようにする、代替食を作る】ように努めていた。またきょうだいへの接し方として、日頃のきょうだいの協力やがんばりに対して、感謝の気持ちを伝えたり、子どもときょうだいの両方を大切

に思っていることを伝えるといった【きょうだいの協力や頑張りへの感謝を伝える】ようにしていた。ほかには、親から見て好ましくないきょうだいの行動を葛藤があるのだらうと【親から見て好ましくないきょうだいの行動を受け入れる】ようにしたり、きょうだいを外出させて【息抜きできる機会を作る】ようにしていた。さらに、【アレルギーの予防行動を意識させないように守らせる】こととして、アレルギー症状を予防する行動を特別視させないように、アレルギーが付いている食器をすぐに洗うといった行動を日常生活習慣としてきょうだいに話している母親もいた。

#### 5. きょうだいの疾患理解を促すために母親が行ってきた内容

きょうだいに対して【子どもの疾患や治療について具体的な説明を行う】と、12名中11名の母親が述べていた。子どものアレルギーとなる食材や、摂取や触れることにより子どもに現れる症状を具体的に教えることや、アレルギーに関する絵本や冊子を読んで疾患の理解を促す関わりをしていた。また、症状が出た時の薬や対応の必要性を話す、経口免疫療法のために子どもに用意したものはきょうだいには分けられないことを伝えること等を通して、治療についての説明も行っていった。疾患理解を促すためのほかの関わりとして、実際に子どものアナフィラキシーや皮膚症状が出た場合に、それがアレルギーに伴う症状であることを説明したり、子どもの軟膏塗布や包帯を巻く様子を見せながら処置の説明を行っていた。ほかにも、アレルギーを含む食材を食べた後に手や口を洗うことや、アレルギーの付いた食器はすぐに洗うこと、子どもにお菓子を渡す際には親に確認してから渡すようにする等、【子どもにアレルギー症状が出ないようにきょうだいに協力してほしいことについて説明する】ことも行っていた。一方、気をつけてはいてもアレルギー症状が出てしまう場合もあるため、【きょうだいが不安になりすぎる必要はないことを説明する】親もおり、きょうだいが心配をしなくても大丈夫であることを併せて説明している親もいた。さらに、子どもがアレルギー症状により苦しい時や、食べることができない物を周囲で食べられていたらどのような気持ちかであるかを尋ねながら、【子どもの立場になって考えてみることをきょうだいに促す】関わりも行っていた。

#### 6. きょうだい周囲の人から受けてきたサポートと必要と感じるサポート

きょうだいがこれまで受けてきた周囲からのサポートとして、【患者会によるきょうだい同士のピアサポート】が述べられた。食物アレルギー疾患の患者会のイベントに参加し、ほかの家族の様子を見たり話を聞くこと、同じ状況のきょうだいとの会話を通じて「ほかの家族も同じような体験をしている」と知り、「自分や家族だけではない」と気持ちの変化があったように親は感じていた。また、家庭の状況を知っている人や祖父母が、【きょうだいの日頃の協力行動やがんばりを認める関わりをしてくれる体験】も、きょうだいが受けてきたサポートとして認識していた。ほかに、【日頃家庭では食べることを制限される食材を使ったメニューを家庭以外の場所で食べる機会】を設けてもらったり、きょうだいだけを預かってアレルギーとなる食材を使った料理体験をさせてもらったり、遊びに連れて行ってもらうなど、【家庭ではできない体験をする機会】についても、親はきょうだいが受けてきたサポートとして感じていた。さらに、祖父母の家できょうだいだけが甘えさせてもらう機会や、子どもの通院時に地域の支援施設や祖父母がきょうだいの世話をしてくれるといった、【きょうだいの居場所がある】ことも受けてきたサポートとして述べられた。

一方、きょうだいに必要と考えるサポートでは、日常生活では配慮が必要な子どもと共に過ごすことが多いことから、きょうだいと出かけたり一緒に過ごすことが可能となるために、【子どもの居場所や世話をしてくれる場所】を必要としている親がいた。ほかには、【アレルギー疾患や治療に関する情報を得る機会や知識を深めることができる資料】等のツールの必要性も挙げられた。専門職がきょうだいに向けて疾患・治療や入院等についてわかりやすく説明をしてくれる機会や、きょうだいに協力してほしいことを伝えてくれることで、理由がわからないままではなく、納得して生活ができるのではないかと考えていた。さらに、きょうだい同士のピアサポートの経験がない親からは、同じ状況のきょうだい同士が遊ぶ場や話す機会といった【ピアサポートの機会】が挙げられた。また、【子どもの通院時のきょうだいの居場所】がもっとあるとよかったと考えている親もいた。

## V. 考 察

今回の調査で、食物アレルギーをもつ子どものきょうだいの生活上の影響として、【家庭での食事やおやつの内容の変化】や【外食の機会の減少】といった食事に関連したさまざまな内容が挙げられた。食物アレルギーの子どもに行う除去食が家族・きょうだいに及ぼす影響について調査した研究でも、家族が除去食を摂取することや食卓での制限、外食の制限があることが報告されており<sup>7)</sup>、今回の調査結果と同様と言える。一方、今回の調査では、これらの食事生活への影響だけでなく、【子どもの世話のために親がきょうだいに関わる時間の減少】や【親の心身の状態によりきょうだいと親との関係の変化】といった親子の関係への影響も報告された。入院している子どものきょうだいは、親が病気の子どもの世話や付き添いで不在となるため関わる時間が減少することや、それに伴い情緒的反応を示すことが報告されているが<sup>4,8)</sup>、今回の調査では、家庭療養においても同様の親子関係への影響があった。さらに、【手伝いをする機会の減少】や【きょうだい自身の友だちとの交流の機会や外出の機会の減少】といったきょうだいの社会生活への影響もあることが新たに明らかとなった。食物アレルギーの治療では、症状を防ぐために毎日の生活の中で食事の管理や生活環境の調整を継続していく必要がある。そのため、きょうだいや子どもたちの友人に対してもアレルギーを持ち込まないような管理をする必要があり、きょうだいの社会生活にも影響を及ぼすと考えられる。

また、周囲の人から受けてきたサポートについて、今回の対象からはきょうだいが家庭外で幅広い体験を得られる機会を作るために祖父母を始めとしたサポートが述べられた。これまでの調査では、食物アレルギーを持つ子どもの親は、「疾患・症状コントロール上の困難感」や「社会生活上の困難感」等を感じていることや<sup>9)</sup>、食物アレルギーでない子どもの母親よりも疲労度が有意に高いこと<sup>10)</sup>が報告されている。そのような状況において、母親が子どもの生活管理をしながらきょうだいの生活体験を意識していくことは親にとって難しい課題である。そのため、子どもの症状を防ぐための生活調整ときょうだいの生活体験を広げていくには、きょうだいと親に対して家庭内だけでなく、家庭外からのサポートも重要である。

以上から、きょうだいへの影響に対する支援の方向

性として、きょうだいに起こっている影響について親と考える機会を持ち、今回明らかとなった経験者の体験や実施している工夫について共有を図っていくことや、共に生活を送るきょうだいへの対応について、活用できるサポートの助言も含めて医療者が一緒に考えていくことが必要であると考えられる。

食物アレルギーや治療に伴うきょうだいの行動として、【アレルギー除去のための対応に協力】、【与薬の手伝い】、【症状への対応】と、療養行動にきょうだいも一緒に協力していることが明らかとなった。このような行動には、【子どもの疾患や治療について具体的な説明を行う】ことや、【子どもにアレルギー症状が出ないようにきょうだいに協力してほしいことについて説明する】といった、母親がきょうだいの理解や協力を促すように情報提供や依頼を行っていることが関連していると推察される。一方できょうだいは、【食事や日常生活での制限に対する不満】や【食べ物への欲求を示す】行動を表していたり、【親がきょうだいに関わる時間や関心が減少することを寂しがる】行動も示していたことから、不満を持ち我慢をしていることも明らかとなった。それに対し親は、【きょうだい不安になりすぎる必要はないことを説明する】、【親から見て好ましくないきょうだいの行動を受け入れる】というように、きょうだいに過重な負担がかからないように配慮し、きょうだいの不満を受け入れる行動をとっていた。

以上のように、食物アレルギーの子どもをもつ母親は、きょうだいへの協力を求めながらも、きょうだいの気持ちに配慮しており、通常の子育てに加えて、食物アレルギーをもつ子どもの健康管理やきょうだいへの影響を考慮して毎日の生活の中で対応している実態が明らかになった。これまでの報告では母親は子どもの世話にかかりきりにならざるを得ないため、上の子どもに我慢させる心配や、食物アレルギーに対して思うように対処できない不全感を感じることも言われている<sup>9)</sup>。そのため、親が子どもときょうだいの子育てのバランスに自信をもって望んでいけるような支援の検討も必要と考えられた。

今回の調査の対象の特徴として、食物アレルギーの子どもよりも年長のきょうだいがいる母親が12名中11名と多く、きょうだいが受けている影響やそれに伴う行動について、年長のきょうだいがいる対象者から多様な体験が述べられた。食物アレルギーと同様に、日

常生活の中で食事への配慮を始めとした療養行動が必要な1型糖尿病においても、きょうだいの出生順位により食事や間食への関わりが異なることが報告されている<sup>11)</sup>。今回の調査結果では、子どもより年上のきょうだいが、子どもの食事や症状についての配慮や気遣いの行動を示す一方で、日常生活での制限に対する不満を述べていた。きょうだいが年長の場合、子どもの治療や症状に伴い、それまでの日常生活で培ってきた食生活や社会生活習慣について、きょうだいの思いとは関係なく変化を余儀なくされるため、きょうだいの理解や納得が十分に得られていない場合、きょうだいへの影響が大きいと考えられた。

また、今後きょうだいに対して必要なサポートとして、専門職がきょうだいに向けて疾患・治療についてわかりやすく説明をしてくれる機会や、きょうだいに協力してほしいことを伝えてくれることも挙げられた。医療者は、親や疾患をもつ子どもに対して、症状や日常生活上の制限について理解を促す関わりを行うことは可能であるが、外来通院の機会だけではきょうだいと関わるの機会を持つことが難しい。きょうだいが日常生活の中での変化や制限について受ける心理社会的影響を最小限にするための支援の場を検討する必要性が考えられた。

## VI. 終わりに

本研究の対象者は、患者会に所属する会員であるため、食事管理や生活管理について得ている情報が多いといった傾向も推察され、研究結果には一定の限界があると考えられるが、食物アレルギーをもつ子どもの疾患や治療に伴い、共に生活を送るきょうだいも日常生活や社会生活においてさまざまな変化や制約を体験していることが明らかとなった。医療者は食物アレルギーをもつ子どもの日常生活の状況の確認を行う過程で、きょうだいとの生活の調整を親がどのように図っていけるかの視点も持ちながら関わっていくことが必要と考えられた。

今回の調査にあたり、ご協力いただいた対象の皆様、また患者会の皆様に、深く感謝いたします。

本研究の一部は、第50回日本小児アレルギー学会において発表した。本研究は、平成24～26年度 科学研究費

助成事業（基盤研究 C24593383）の助成を受けて行った研究の一部である。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 中野綾美. 健康障害をもつ子どものきょうだいを支える看護アプローチ. 小児看護 2002; 25: 459-465.
- 2) 泊 祐子. 病児のほかにきょうだいのいる家族への看護. 家族看護 2008; 6: 76-82.
- 3) 柴山宏美, 桑森恵美, 中山美奈. 入院患児を持つ家族の生活の変化について. 東京医科大学病院看護研究集録 2005; 25: 59-62.
- 4) 堂前有香, 石川紀子, 藤岡 寛, 他. 入院中の子どものきょうだいのストレスの実態ときょうだい・家族が必要とする支援. 日本看護学会論文集小児看護 2010; 41: 184-187.
- 5) 立松生陽, 市江和子. 食物アレルギー児と家族の生活背景の特徴および母親の生活調整・アレルギーに関する認識. 小児看護 2008; 31: 942-947.
- 6) 藤塚麻子, 菅井和子, 船曳哲典, 他. 小児食物アレルギー患者における除去食解除の指標と保護者の意識調査. 日本小児アレルギー学会誌 2008; 22: 779-786.
- 7) 宮城由美子, 高橋みどり, 岡部貴裕, 他. 食物アレルギー児に行う除去食が家族・きょうだい児に及ぼす影響について. 外来小児科 2010; 13: 306-309.
- 8) 新家一輝, 藤原千恵子. 小児の入院と母親の付き添いが同胞に及ぼす影響—同胞の情緒と行動の問題の程度と属性・背景因子との関連性—. 小児保健研究 2007; 66: 561-567.
- 9) 秋鹿都子, 山本八千代, 宮城由美子, 他. 食物アレルギー児を持つ母親の主観的困難感と看護者に望むもの. 小児保健研究 2011; 70: 689-696.
- 10) 土取洋子. 食物アレルギー児を養育する母親の疲労とライフスタイルに関する考察—3歳児健診における質問紙調査から—. 小児保健研究 2010; 69: 423-431.
- 11) 出野慶子, 中村伸枝, 金丸 友, 他. 1型糖尿病をもつ子どものきょうだいの体験—ファミリーキャンプにおけるきょうだいの話し合いの分析—. 千葉看護学会誌 2007; 13: 53-60.

**[Summary]**

We surveyed 12 parents with at least two children to elucidate the influences by the siblings of children with food allergies and the associated behavior and family interactions of those siblings. The healthy siblings were between ages 3 and 21 years and experienced social as well as dietary lifestyle changes in response to the food allergies of their allergic sibling. The parents took care to carefully explain the disease and treatment of the allergic child to the healthy siblings and asked for

the cooperation of the healthy siblings in dealing with the food allergy in addition to paying attention to the healthy siblings' diet. Systematic support is necessary to minimize the psychosocial impact of changes and restrictions to daily living that the siblings of children with food allergies experience.

---

**[Key words]**

sibling, sibling support, food allegedly